

返し〇藤原かくぞ

みそかまでいのる社のかひなくば神無月とやいふべかるらん

〔夫木和歌抄二十八〕天元四年四月小野宮歌合なぞく、いねのおひたるかひつ物、

よみ人不知

秋またぬいねかで見しはなよ竹のしたばにねざすこにこそありけれ

〔長秋記〕保延元年六月六日戊申於院有和歌略中事畢有連歌并なぞくものがり的事等云々

〔散木弃詞集七〕ある人のもとになぞく物語をあまたつくりてとかせにつかはしたりけるを

ことざまにときたりけるを又つかはすとてよめる

いかでもと思ふ心のみだれをばあはぬにとくる物とやばしる

〔散木弃詞集十〕沓冠折句歌

なぞく物がたりよくとくと聞えける人のもとへつくりてつかはしける歌

小倉山峯より出て行月もあふ坂まではくまなかりけり

〔徒然草上〕大覺寺殿にて近習の人どもなぞくをつくりてとかれける所へくすし忠守参りた

りけるに侍従大納言公明卿我朝のものとも見えぬ忠守かなとなぞくにせられけるを唐瓶

子とときでわらひあはせられければ腹だちて退出にけり略中

資季大納言入道とかやきこえける人具氏宰相中將にあひてわぬしのはれん程のこと何事

なりとも答申さばらんやといはれければ具氏いか侍らんと申されけるをさらばあらがひ

給へといはれてはかくしき事はかたはしもまねびしり侍らねば尋申すまでもなし何とな

きをるごとの中におぼつかなきことをこそ問奉らめと申されけりましてこもとのあさ

きことは何事なりともあきらめ申さんといはれければ近習の人々女房なども興あるあらが